

横井左平太・大平のアメリカ留學生活

— アメリカ側の史料から —

高 木 不 二

はじめに

幕末にアメリカにわたり、帰国後も明治政府あるいは地元熊本において少なからぬ功績を残した、横井小楠の甥にあたる横井左平太・大平兄弟については、これまで米国留學中の様子に関して、彼らの手になる一次史料は「現存しない」とされ、ほとんど研究がすすめられてこなかった⁽¹⁾。しかし国内はともかく、アメリカ側に史料は少なからず存在する。本稿は、ラトガース大学ユニバーシティ・アーカイブスの史料などを用いて、この空白を埋めるための試みである。おもに左平太・大平の直筆書簡をふくめた一次史料と、グラマースクールや海軍兵学校に関する関連の史料を紹介するかたちで、かれらの留學生活を可能な限り明らかにしていきたい。

彼らの留學は、その後日本人のアメリカ留學の重要な拠点となったニューブランズウィックへの留學の第1号であり、日米関係史の重要な画期をなす。本稿が、日米交流史さらには日本近代史の解明に向けたささやかなステップとなれば幸いである。

1. アメリカへ

慶応二年四月、横井左平太・大平は長崎からアメリカにむけて出航した。二人は横井小楠の兄左平太（時明）の遺児で、当時兄に代わって家督を継いだ小楠が、親代わりとして万事彼らの面倒を見ていた。彼らは勝海舟の設けた神戸海軍操練所をへて、長崎英語所（済美館）に学び、オランダ改革派教会の宣教師フルベッキ（G. F. Verbeck）の教えを受けていた。しかし彼らは慶応元年段階から幕府の主催する洋學教育に不満をいだき、洋行の必要性を小楠にうたっていた。小楠は、拙速をいましめつつも最終的にはこれを入れ、費用を自分の弟子達から調達して、彼らを送り出したのである。幕府の許可もなく、藩や外国の力を借りることもない、まったく自力での密航であった。

彼らはアメリカの帆船に乗って、ジャワ経由喜望峰まわりでニューヨークにむかった。長い船旅のなかで船員や船長に英語を学びつつ、ニューヨークのフルトンストリートに、フルベッキの紹介状をもって彼らがオランダ改革派教会の事務所をたずねたときは、すでに新暦で1866年（慶応二年）も11月（一説には10月）になっていた⁽²⁾。

それを迎えたのは外国伝道局の主事をつとめていたフェリス（J. M. Ferris）であった。フェリスの回想によれば、彼らは鬻を落し、船長につきそわれてやってきたが、渡航の目的をたずねると、日本の港に侵入し威嚇するイギリスやフランスの軍艦を攻撃し、破壊しうるような大軍艦を造りたいからだ、答えたという⁽³⁾。このとき左平太は22歳、大平は17歳であったが、その目的が祖国

日本の海軍建設への寄与であったことは間違いあるまい。そして、ここに小楠の思想が大きく影を落としていることは、すでに他のところで述べたとおりである⁽⁴⁾。

フェリスはとりえず語学をはじめとする基礎学問を学ぶ必要性を彼らに説き、当面の不足の費用をたてかえるかたちで、彼らをニューヨーク南方の都市ニュージャージー州ニューブランズウィック (New Brunswick) に送り込んだ。オランダ改革派教会系のラトガースカレッジ (Rutgers College) と、その付属予備校ともいうべきラトガースカレッジ・グラマースクールがあったからである。

しかし受け入れは簡単にはすまなかった。当時ラトガースに寄宿舎はなく、指定の下宿屋が何軒かあったが、いずれも「野蛮な異教徒」を受け入れることに難色をしめたのである。しかしチャーチストリート 62 にある下宿を経営するヴァン・アースデール (Van Arsdale) 夫人は、彼らに同行していたフェリスにこう申し出た。

二人を受け入れましょう。そのためにもし使用人や他の下宿人が逃げ出し、いなくなってもかまいません。二人の来訪は日本の人々にキリストの福音を伝えるための良いチャンスと考えましょう。

当時の下宿は単なる下宿屋ではなく、ラトガースカレッジあるいはグラマースクールから家庭教育を託された教育の場であったのである。チューターには、当時グラマースクールの校長であったアレクサンダー・マッケルベイ (A. McKelvey) がみずからあたることになった。

こうして伊勢佐太郎、沼川三郎と名前を変えた横井兄弟は、ラリタン河畔の繁華なニューブランズウィックの街を横目にみながら、グラマースクールの校長宅やグラマースクールに通うことになったのである。ところで、彼らが約 3 年間過ごすことになったニューブランズウィックとはいかなるところであったのだろうか。

2. ニューブランズウィックにて

現在のニューブランズウィックは、アメリカ東海岸ニュージャージー州にある人口 5 万人に満たない小都市である。ニューヨーク市南方約 50 キロの地点にあり、ニュージャージー州立ラトガース大学の緑豊かなキャンパス群にかこまれた、交通至便な学園都市の景観を有している。しかしその成り立ちは、大学町としてのそれではない⁽⁵⁾。

ニューブランズウィック周辺はもともと濃いヒマラヤスギの森と低湿地におおわれた地域であったが、17 世紀にニューヨークとペンシルバニアをつなぐ古道の往還がしげくなるとともに町が誕生する。ラリタン川の渡しがその出発点で、そこに小さな集落が生まれ、その集落は当初「プリグモアの沼地 (Prigmore's Swamp)」と呼ばれていたが、規模が大きくなるにつれ「The River」さらには「Inian's Ferry」と呼ばれるようになった。やがてオランダ人による入植がすすみ、農地が開墾され、町ができ、1716 年に当時この地の統治者であったイギリス国王ジョージ 1 世がドイツのブランズウィック公でもあったことにちなんでニューブランズウィックという地名を正式に採用した。このころ、現在のラトガース大学の中心部あたりは、りんご園であったという。

1774 年ジョン・アダムスは旅行記にこの町の様子を次のように記している。

町には英国教会、オランダ教会、プレスビテリアン (長老派教会) の教会が建ち、小規模な取

引が行われ、職人もやってくる。川には1本マストのスループ型帆船の影も見える。…道の何本かは舗装され、3つ4つ立派な家も立っている。全体としては300から400軒の家と150世帯くらいからなる小さな町である。

しかしラリタン川の舟運の発達とともに、19世紀初頭にはニュージャージー西部地域の穀物の重要な集散地になっていた。ニューブランズウィックは、当時舟が海からさかのぼれる最上流地点にあり、内陸部から大量の麦やコーンなどの穀物が陸路運びこまれ、海岸部からの魚、塩、乾物などと交換されて、ニューヨークやニューイングランドなど各地に船で運ばれた。ラリタン川はニュージャージー西部とニューヨークをはじめとする東部主要都市をむすぶ唯一の出口であったのである。

ある記録によれば、1828年に人口5000人、750の家が建ち、100を越える店があり、活気に満ちた面白い町で、駅馬車の駅もあったという⁽⁶⁾。また別の史料によれば、1829年には人口は1万人を下らなかったという⁽⁷⁾。

しかしその後アメリカの西部開拓運動と結びついた全国的な「交通革命」の進展のなかで、ニューブランズウィックをとりまく環境も大きく変化する。1833年デラウェア・ラリタン運河が開かれ、35年にはニュージャージー鉄道も完成する。運河はニュージャージー州の西側の州境を南北に貫くデラウェア川上流のレイブンロック（Raven Rock）と、ニューヨーク港に通じる東西に走るラリタン川下流のニューブランズウィックをつなぐもので、川に沿って水路が引かれ、馬が舟を引く細い道や、労働者の休憩・宿泊所であるカナルハウスも整備された。水路は75フィート（22.9メートル）の幅と7フィート（2.1メートル）の深さを持ち、75から100トンの舟が走れるようになっていた。この運河は皮肉にも、デラウェア川にそったニュージャージーの西部はもちろん、隣接するペンシルバニア州の東北部、ニューヨーク州西南部の内陸地域に産する大量の農産物や鉱産物を、ニューブランズウィックを素通りして直接ニューヨークに運ぶことを可能にするという結果をもたらした。また鉄道はニューヨークに隣接するジャージー・シティとニューブランズウィック間を結ぶものであったが、これによる人間・情報の迅速な移動は、ニューヨークにいたるニューブランズウィックの中継都市としての独自の役割（客船の定期便も走っていた）を急速に減少させていった。なお当初は、汽車はラリタン川を越えず、市内へは橋を歩いて渡って入ったようである。市内に汽車が入れるようになったのは3年後のことであった。橋は当初木造であったが、上は汽車が、下は馬車や歩行者が通れる二段構造になっていた様子が当時の絵に描かれている。現在のような石の橋になったのは1878年のことである。

この運河と鉄道により商業都市としてのニューブランズウィックは大きな痛手をこうむった。しかしそれにかわって豊富な水と舟運、労働力確保を容易にする鉄道の便、そしてなにより背後にニューヨークという大市場がひかえるという地理上の利点を生かして、川に沿った地域を中心に近代工場が姿をあらわし始める。1839年のちにザ・ニュージャージー・ラバー会社となるゴム製造の機械生産が開始されたのを初めとして、工場建設がすすみ、ニューブランズウィックは新たに工業都市へと変貌をとげていった。この時期は全米レベルでも、4年間におよぶ南北戦争（1861～1865）とその後の復興期を経て、東部を中心に爆発的工業化と都市化がすすんだ、いわゆる「金ぴか時代」への移行期にあたる。

1870年、日本人留学生として横井兄弟たちがやってきた直後の調査によれば、ニューブランズウィックは、人口は15,059人、3,155戸、32の工場と1,578人の従業員を擁する都市になっていた。当時描かれた街の鳥瞰図をみると、運河には蒸気船が浮かび、その沿岸では大きな工場の煙突が黒煙を吐き、市内には立派な教会や邸宅が立ち並ぶ町の様子が誇らしげに描かれている⁽⁸⁾。ニューブ

ランズウィックは現在のイメージから想像されがちな「静かな学園都市」ではなく、新興の工業都市であり、当時のラトガス・グラマースクールの規約の表現を借りれば、学生たちをよりよく指導し育てるには十分な注意を必要とする、「large city」であったのである。

彼らの下宿はチャーチストリートがジョージストリートと交差する地点から、ラリタン川に向かって右側の二軒目に位置した。ほぼ市の中心街にあたるが、名前のとおり教会にかこまれ、裏には墓地がある宗教的雰囲気をつよいところであったとおもわれる。

3. ラトガースカレッジ・グラマースクールの沿革

彼らを通ったグラマースクールについても、その歴史や教科内容について、これまでまったく言及されたことはないと思われるので、まずはその成り立ちから振り返っておきたい⁽⁹⁾。

ニューブランズウィックのグラマースクールはクイーンズカレッジ（後のラトガースカレッジ）に遅れること2年、1768年にラリタンバレーの有志6人によって設立された。カレッジの実際の始動は67年なので、ほとんど同時に発足したといつてよい。グラマースクールは当初からクイーンズカレッジとの関係が深く、設立メンバーの6人のうち3人までが、オランダ改革派教会の牧師であった。設立当初の場所は不明であるが、1771年からはカレッジと同じオルバニーとニールソン通りの交差点北東の角にあった。

グラマースクールはクイーンズカレッジの入学を準備する予備校として位置づけられ、カレッジ同様英語で講義がなされ、その教科もカレッジの入学試験で課されるラテン語とギリシャ語の読み書きと、数学が重視された。

18世紀の後半、独立戦争のさなかカレッジ同様ニューブランズウィックからの避難を余儀なくされ、一時サマセットカウンティの西部に移ったが、1780年にはニューブランズウィックに戻っている。

1787年に規約がもうけられたことが確認できるが、それによればグラマースクールには入学試験に合格したものだけに入学が許可され、入学金は20シリングであった。授業料は年間5ポンドとなっており、その他不時の鐘つき代や冬のまき代は別に徴収された。授業時間は、冬は9時から12時、2時から5時、7時から9時、夏は5時から7時、8時から12時、3時から6時となっている。試験は年4回、1月、4月、7月、9月におこなわれた。日常生活にもこまかな規則が設けられ、朝晩の祈りはもちろん、安息日の公式礼拝も義務付けられていた。また試験とは別に、カレッジをめざす者には、シーザーのガリア戦記、キケロの演説、ヴァージルやアエネイドの詩、福音書などのラテン語・ギリシャ語の著作からの英訳が求められていた。

1791年校舎はカレッジとともに、ジョージストリートとリビングストーンストリートの角の新校舎に移るが、この時より実用的な学問を求める声をうけて、English Schoolが併設された。このイングリッシュスクールでは、英語の読み書き、算数・応用数学が教えられた。

1794年にカレッジは資金難から閉鎖されたが、グラマースクールは存続した。その間学生数は増え続け、1801年から1806年のあいだには毎年24人が入学していたが、1808年には64人の入学者が記録されている。カリキュラムは依然として、古典的な色彩が強く、その雰囲気は宗教的、道徳的色彩の濃いものであったが、このグラマースクールの発展が1807年のクイーンズカレッジ再開を準備したといえよう。

1811年グラマースクールはカレッジとともに現在のカレッジアヴェニューキャンパスの地に移り、カレッジの中心ビル（現オールドクイーンズ・ビル）に入った。1816年クイーンズカレッジ

はふたたび閉鎖されたが、ここでもグラマースクールは存続し、1825年の再開に貢献した。ただしこのとき、カレッジが有力な支援者ヘンリー・ラトガースの名にちなんで、ラトガースカレッジと名称を変更したのにもない、名称はラトガースカレッジ・グラマースクールとなっている。

1830年グラマースクールはカレッジアヴェニューとサマセットストリートの角に建てられた新しい建物に移った。2階建て2階部分はカレッジの学生団体が使用したが、1階部分の二部屋がグラマースクールに充てられた。このビルが、以後グラマースクールの定住地となった。

1835年の学生登録者は56名であるが、そのうち40名は古典プログラムをとり、あとの16名はイングリッシュスクールに属している。この段階ではイングリッシュスクールはグラマースクールに組み込まれているが、それぞれ別の部屋で学習をおこなったようである。イングリッシュスクールは簿記や航海学、測量術、新しい外国語など実用性のたかいものを教えたが、1842年には全67名の学生うち39名がこのプログラムを履修しており、古典クラスは28名と退潮の傾向を示している。

こののち古典プログラムにも化学や政治経済学、フランス語などの新科目が設けられるなど改革がすすめられていくが、グラマースクール全体としてはカレッジとの関係強化を進める方向に進んでいく。

しかし19世紀半ばにはゆり戻し現象がみられ、グラマースクールとカレッジそしてニューブランズウィック神学校の、三者の調和が強くと求められるようになり、グラマースクールは牧師の養成所的な性格を強めていった。その結果施設の改善は無視され、学生数も激減する。1862年11月の時点では、学生は5人のみというありさまであった。もっとも、このときの学生数の減少には、前年の南北戦争の勃発という要因を加味して考える必要がある。

カレッジも危機感をもち、神学校からの独立をすすめることとなり、グラマースクールも1863年以降方向転換が図られていく。校舎の2階部分からカレッジの学生団体が出たことにより、グラマースクールは多くの学生を収容することが可能となり、最終的に学生を150人に増やし、内40人をラトガースカレッジに送り込む計画が立てられた。努力がかさねられた結果、南北戦争終了後の1866年には学生112名、そのうち21名がラトガースカレッジに入学するというところまで、状況は回復している。

カレッジ準備プログラムとしての古典プログラムも改善され、1869年には全学生120名のうち71人が古典プログラムを採るというレベルに達した。横井兄弟が学んだグラマースクールは、こうしたカレッジ志向が強まっていた時期にあたる。

カレッジの雰囲気は次のような窓口からはいり込んだ。1つは校長を経由して、2つはカレッジの学生団体Literary Societyを通して。

横井左平太・大平兄弟のチューターとなったのは、前述のとおりアレクサンダー・マッケルベイであったが、彼はラトガースカレッジの卒業生で、カレッジスタッフとしてとして教鞭をとったが、同時にライブラリアンとしての経歴ももち、1866年から約1年間グラマースクールの校長を務めた人物であった。校長がチューターを勤めたのであるから、それはラトガースカレッジの雰囲気を体現する教育であったといえよう。そしてその校長の公邸には常に10人から20人の牧師をめざす学生が住み込んでいたというから、そこに出向く留学生にたいする教育は、語学中心とはいえず宗教的色彩の強いものであったことが想像できる。

もう1つの学生団体については、かつて同じ校舎に同居していたカレッジの団体の影響下に1848年Gnoaldi Societyが自主的に設けられ、そこにおいて討論の練習がおこなわれた。これは後に設けられたAdelphiという団体とともに、二大Literary Societyとして、グラマースクール

公認の学生団体となった。これらがカレッジの活気あふれる雰囲気をグラマースクールに伝える役割を果たしたことは容易に察しがつく。

1869年から学生数の増加に対応して、グラマースクールの建物は大規模に改造され、建て増された。北側に2階建てのウイング、3階には体育館が設けられ、カレッジアヴェニュー側にはタワーと、階段の吹き抜けが加わり、現在のラトガース・アレクサンダー・ジョンストンホールの容になって翌年竣工した。ここは1957年までグラマースクール（あるいはプレパラトリースクール）として使用されたが、現在はラトガース大学の出版関係のオフィスとして内部を改装されて使用されている。

4. グラマースクールの規約

では、グラマースクールはどのように運営されていたのだろうか。上記のように規模が大きくなり、カレッジ志向が強まった時期のグラマースクールの規約のうち、1866-67年と1878-79年のものが、「CATALOGUE OF RUTGERS COLLEGE」に収録されている。前者は言うまでもなく横井兄弟が入学したマッケルベイ校長のときのものであり⁽¹⁰⁾、後者は、内容からみてライリー（D. Reilly）が校長在任時の1867~74のあいだにつくられたものが、そのまま、あるいは必要な修正を加えられたかたちで収録されたものであると考えられる⁽¹¹⁾。ともに、日本人留学生の学生生活を知らうる基本的かつ貴重な史料であるので、以下I・IIとして順に紹介していきたい。

I (1866-67)：この学校の学年暦は、9月3日の月曜にはじまり、40週つづく。それは3つのセッションからなり、第1セッションは9月3日から16週、第2セッションは1月3日から13週、第3セッションは4月11日から11週である。この間に2つの全体試験（Public Examination）がある。第1回は第1セッションのおわりに、もう1つは学年末である。

この学校における、いかなる努力も惜しんではならない。履修課程を全うするため、学校当局を満足させるため、カレッジに入るべく必要かつ十分な準備をするため、あるいはビジネスに就くために。

そうした学習は、教職員の監察と、カレッジの理事会のコントロール下に置かれている。

卒業後カレッジに入るためのクラスが、第1セッションのはじめに決められる。このクラスに入るには、さまざまな学力に関して厳しく審査され、さらに授業でやった学習について、さらなるテストをうけてはじめて許可される。

下宿は適切な料金で、個人の家庭（Private families）におかれる。すべての下宿生は、校長の特別なケアの下にある。

《費用》

学費—共通の英語部門	\$ 10.00	10週のコォーターごと
上級英語部門	\$ 12.00	同上
ラテン語（上記を含む）	\$ 15.00	同上
ギリシャ語（上記を含む）	\$ 17.00	同上
雑費	0.50	セッションごと

学費は各セッションのはじめに、それぞれの日数に応じた総額を支払うこと。欠席による減額は無い。ただし、長期の病気による場合は除く。上増し（extra charge）もない。ただし、現代語（Modern Language）についてはこの限りではない。

II (1878-79) : 1870年の新校舎設立後のグラマースクールは、ラトガースカレッジのラテン語教授である校長デュイット・ライリー (Dewitt T. Reiley) が指揮を執って運営してきた。グラマースクールは、カレッジに入るための準備をする古典学校 (Classical School) であり、また技術・科学学校 (Technical and Scientific School) に入るため、あるいは今日のビジネス・ライフに適応するための教育を行うところである。

課程としては、6歳から12歳までの少年が初等部に入学する。そこからカレッジに入るまでに、4つのクラスを経なければならない。すなわち、3等、2等、准1等、1等である。また科学学校やビジネス・スクールに入る場合は、3等、2等、准1等に準じたクラス (B・A・H) のコースをとることができる。

《学習内容》

*初等部 (Primary Department)

算数 (分数まで)、地理 (Guyot のテキスト中級開始)、英文法 (Swinton の Language Lessons)、リーディング (Hillard の第2・第3リーダー)、スペリング (Paterson の Speller)、植物学 (課題研究)、自然科学 (Dr. Lockwood による講義)

その他 ライティング、作文、演説、図画、体操、課題研究

*第1年次 = 4等クラス

算数 (分数から)、暗算 (Brooks のテキスト)、地理 (Guyot の中級終了)、英文法 (Swinton の Elementary)、米国史 (Lossing の初級)、ラテン語 (Fischer の文法・リーダー開始)、ラテン語作文 (Fischer の作文開始)、リーディング (Hillard の第4リーダー)、スペリング (Willson の Larger Speller)、自然科学 (講義)

その他 ライティング、作文、手紙ライティング、演説、軍事教練

*第2年次 = 3等クラス

算数 (利子から)、暗算 (Brooks の標準)、ラテン語 (文法・リーダー、統語論まで)、ラテン語作文 (Fischer の2まで)、地理 (Guyot のグラマー・スクール)、英文法 (Swinton の Progressive 統語論まで)、米国史 (Barnes のテキスト)、ドイツ語 (Fischer の Ahn 開始)、リーディング (Hillard の第5)、スペリング (Willson の Larger Speller)、製図 (Krusi のテキスト)、自然科学 (講義)

その他 ライティング、作文、手紙ライティング、演説、軍事教練

B 科学クラス

上記3等クラスのカリキュラムからラテン語を除き、簿記 (Bryant, Stratton のテキスト) に替える。

*第3年次 = 2等クラス

代数 (関数から)、算数 (Brooks の新標準)、ラテン語 (文法・リーダー終了)、ラテン語作文 (Fischer の31まで)、英文法 (Swinton の Progressive)、英国史 (Goodrich のテキスト)、リーディング (Hillard の第6)、スペリング (Willson の Larger Speller)、ドイツ語 (Fischer の Ahn 終了)、自然科学 (講義)、シーザー (ガリア戦記1・2・3)、ギリシャ語 (Leighton の Lesson, Conditional Clauses まで)、ギリシャ語 (Anabasis, 一冊と半分)

その他 ライティング、演説、作文、手紙ライティング、演説、軍事教練

A 科学クラス

上記2等のクラスのカリキュラムからラテン語・ギリシャ語を除き、次のものに替える。

簿記 (Bryant, Stratton のテキスト)、製図 (Krusi のテキスト)、作画 (生理学, Hutchison)、

商業（法律，講義），アメリカ憲法（Alden），暗算（Brooks の標準），自然哲学（Steele）

*4 年次=準1 等クラス

代数（2次関数から），ドイツ語（リーダー），一般史（Swinton），地質学・動物学（講義），英文法・アメリカ史（復習），ラテン語（シーザー4・5・6，キケロ Cantilinarian 演説），ラテン作文（Fischer の3まで），ギリシャ語（Anabasis, 5まで），ギリシャ語作文（Leigton のテキスト）

その他 作文，演説，軍事教練

H 科学クラス

代数（2次関数から），幾何学，植物学（Gey, 講義），化学（Steel, 講義），吹管分析（オブショナル），自然地理学（Guyot），修辞学（Hart），一般史（Swinton），地質学・動物学（講義），ドイツ語（リーダー），製図，作画，演説，軍事教練

*5 年次=1 等クラス

代数（復習），ドイツ語（リーダー），ラテン語（キケロ3つの演説，アエネイド6巻），ラテン作文（Fischer 終了），ギリシャ語（Iliad 6巻），ギリシャ語作文（Leigton のテキストと演説），ギリシャ史と遺物，古典地理学，基礎の復習

その他 作文，演説，軍事教練

《学習内容に関するノート》

- ① 暗誦は20分単位。普通は2単位40分とし，3単位（1時間）を使うこともある。
- ② H 科学クラスは次の科目で，準1級クラスと合流する。
代数，一般史，ドイツ語，化学講義。
同じくHクラスは，次の科目で1級クラスと合流する。
幾何学，作文，演説，軍事教練
- ③ 作文は，全クラス二週間ごと，クラス演説は毎週，全体演説と討論は3週間ごとに行う。保護者は生徒に怠慢の言い訳をさせないようにすること。
- ④ 講義ノートは必ずとらなければならない。それはかならず複写して提出し，検査をうけ，採点されなければならない。

《試験とレポート》

試験は10週ごとに，試験官によって行われる。試験官は多くの場合カレッジの教員から選ばれる。試験の結果は学期末に4回の総合点で評価され，両親か保護者に郵送される。100点満点で，0点は無点で，60点未満は不可（poor）である。

《出席》

登校時間は午前8時30分，下校時間は午後1時30分である。欠席・遅刻そして暗誦が不十分な場合は，両親または保護者の文書が必要である。欠席2日目には両親に連絡がとられる。

ニューブランズウィックを通るペンシルバニア鉄道は1日中動いている。沿線の市や村から来る生徒は，自宅から毎日ニューブランズウィックに通学するが，その学校チケットは割引値段で入手できる。遠距離の生徒は市中の下宿を利用するが，その場合には，ニューブランズウィックのような大きな市では，校長のコントロールは行き届かず，品行上，また健康上の責任は負いきれないということを承知しておいてほしい。

《教員》

ラテン語は校長の管理化におかれる。彼が許可しなければ，他のカレッジへの推薦状は与えられない。

ギリシャ語はアレクサンダー・ジョンストン (Alexander Johnston) の管理化におかれる。彼は 1870 年にラトガースカレッジを卒業して以来、この任にあっている。校長が不在の場合は、彼が学校運営の責任を負う。

自然科学はサミュエル・ロックウッド博士 (Dr. Samuel Lockwood) の管轄下におかれる。彼は著名な学者であり、自然史、植物学、化学、テクノロジー、身近な化学について生徒は最高水準の教育を受けることができる。また地質学と自然史については、完璧な陳列室があり、さらにライリー教授やロックウッド博士の陳列室や、カレッジの博物館も利用することができる。

その他の担当は以下のとおり。

エドワード・ライリー氏 (Mr. Edward Reiley) ……………英語・吹管分析・作画
ウィリアム・ビッセル氏 (Mr. William Bissell) ……………数学・ビジネス学習・音楽
ギュスターブ・フィッシャー教授 (Prof. Gustavus Fischer) ……現代語
ハーバート・キャメロン氏 (Mr. Herbert Cameron) ……………ライティング・軍事教練
フレンチ女史 (Miss French) ……………初等部

《学期と学費》

学費は 4 分の 1 学期 (Quarter) につき次のようである。

初等部		9ドル
古典コース	4等	13ドル
	3等・2等クラス	16ドル
	準1等・1等クラス	18ドル
科学コース	Bクラス	13ドル
	Aクラス	14ドル
	Hクラス	15ドル

授業料は 4 回に分けて納めるが、前納が望ましい。生徒はいつでも入学でき、適当なクラスに振り分けられるが、学期の初日から出席することが望ましい。

希望者はフランス語、音楽、美術などに関して、特別の教員を雇うことができるが、その授業料は一般の授業料と一緒に納められる。また例外として、勉強のおくれた生徒については、両親の同意と、校長の了承を得て、授業時間外に何人かの教員から個人教授をうけても良い。

《学内下宿》

校長はハミルトンストリートに住み、20 人の学生を同宿させ、面倒を見る。彼はファミリーの長として全権をもち、全責任を負う。授業時間帯には教師の指示に従う。校長宅の 8 エーカーのグラウンドには、憩いのための木が植えられ、野球やアスレチックのための施設が設けられている。毎日、野外での運動、雨天の場合は体育館での運動が求められる。

日曜日には、とくに両親からの指示がないかぎり、午前中はカレッジのチャペルの説教に出席しなければならない。午後は聖書の講義がなされる。校長は、生徒が日曜日を嫌うことのないよう、あるいは汚されることのないように務める。生徒は特別の許可なく外出することは許されない。

これをみると、左平太・大平は校長から個人指導をうけつつ、3 年間の科学学校の準備コース (B・A・H コース) にすすんでいった可能性がたかい。金銭的にめぐまれず、しかも海軍の軍事技術を早急に学ぼうと意気込む彼らにとって、時間的にも、授業料の面でも短期で割安のコースは、最もふさわしいものであった。

しかし上記のカリキュラムをみれば、英語力が不十分な彼らにとって、その道のりがきわめて険

しいものであったことは想像に難くない。

5. 手紙からみる学生生活 (1)

現在横井兄弟の自筆の手紙は、ラトガース大学ユニバーシティ・アーカイヴスに4通(以下①②③④として紹介する)残されている⁽¹²⁾。これに加えて、筆者が発掘した1872年左平太がフェリスに宛てた書簡⑤⁽¹³⁾と、犬塚孝明氏が紹介された1869年畠山義成から左平太に宛てた書簡⑥⁽¹⁴⁾、および永井環氏が紹介された1870年3月3日づけの左平太から日下部太郎あての書簡⑦⁽¹⁵⁾の合計7通を紹介し、解説を加えるかたちで、彼らの学生生活を垣間見ることにしたい。これに、ここまで述べた生活空間やグラマースクールの運営状況などの背景を加味すれば、彼らの留學生活の実態はかなり具体的に明らかになるであろう。

① 横井左平太・大平兄弟からヴァン・アースデール夫人あて書簡(1867年7月24日)

Flatland July 24 1867

Our Dear Mrs. Vanarsdale

We have arrived here last Friday noon. Dr. Ferris he was very busy that day therefore his son brought us to here. We think this place is very nice for spend summer. Last Friday and Saturday was very rainy days. We could not go out much. We have been church last Sunday. Sing and music look us very difference we like better Brunswick churches. We have visited your friends last Monday evening. We saw Miss Bergen. We could not go to Miss Tuna. They are all very well. We are going again to Miss Tuna's home. Mr. Brett and Mr. Ferris, they wish we shall spend all our vacation in here. But we wish quick go home we shall intend to go home from this Saturday perhaps next week we should like to go home as soon to possible. We have purposed to write you long letter. But we can not write in English a long letter. We shall tell you after get home. We write a great many improper you would not understand well

Yours very truly

S. Ise

S. Numagawa

兄弟がアメリカにきてから約1年後の最初の夏休みの様子がわかる書簡である。発信地のフラットランドは、現在のニューヨーク市ブルックリン地区の一角をさすと思われるが、フェリスの配慮で避暑のためニューブランズウィックからやってきたのであろう。書面からは、次のようなことが読み取れよう。

(i)先週の金曜日に、フェリス氏の息子さんに案内されてこちらについたこと。(ii)日曜日に礼拝に教会にいったが、ニューブランズウィックの教会のほうが良いとおもっていたこと。(iii)月曜にはヴァン・アースデール夫人の友人であるミス・ベルゲンを訪問したが、ミス・ツナのところには往けなかったこと。(iv)ブレット氏やフェリス氏は夏休みをここで過ごすよう勧めているが、彼らは来週にはニューブランズウィックに帰りたいと思っていたこと。

兄弟はここでフェリスやヴァン・アースデール夫人の知り合いのオランダ改革派教会のメンバー

にあたたく迎えられ、いろいろ面倒をみてもらっているが、そうした教会メンバーの好意にたいし戸惑っている様子がうかがえる。文面からみても、彼らが自覚しているとおりに英語力は不足しており、そうした段階で、多くの見知らぬ人に接触するというのは、かなりつらいものもあったのではないだろうか。

② 横井左平太からヴァン・アースデール夫人あて書簡（1869年8月25日）

Stone Ridge Aug. 25 1869

Mrs. Van Arsdale

My dear Madam

I intended to write you but could not until today; I hope you will pardon me. I have received a letter from my brother three weeks ago, which he sent from the Pacific ocean. He said that he left San Francisco on the 3rd of July and the steamer met a returning steamer in the Ocean, on the 12th of the same month, so he sent a letter to me. If no accident occurs he is now in Japan. He said his illness is a little better, but since he left San Francisco for a few days the weather was very cold the thermometer about 30 or 32 degree so he had to cough very much. I am very anxious every day about him, but I think no doubt he reached Japan at the end of last month. I am expecting a letter from him this week or next which he will have sent from Yokohama. If you have received a letter from him please you will reach some of my friends in New Brunswick then they will send it to me. A few weeks ago I had a letter from Kusakabe. I am very sorry that his health is not very good so that he could not stay at Lake George, but he came back to New York and is now staying at Flatbush Academy. I think it better that he stays there at present. This vacation we had very cool weather. It is a very pleasant for me indeed, and I am studying every day with Mr. Hashiousk. I think I shall go back to New Brunswick the middle of next month. I shall be glad soon to see you again. My brother his kind regard for all of you

Yours very truly,
Sataro Ise

3年目の夏休みの書簡である。この夏には弟の大平が肺結核をわずらって帰国の途についている。この書面は、その弟大平の帰国時の様子や、同僚で肺をわずらっていた日下部太郎の動静が記されていて興味深い。確認できるのは次の点である。

(i)弟の大平は、サンフランシスコから7月3日に出航したこと。7月12日づけで、船中から兄あてに手紙を書いていること。なにごともしなかったならば、7月末には横浜についているであろうこと。(ii)兄は弟の横浜からの手紙を待っており、下宿のアースデール夫人にその転送をあらかじめ頼んでいること。(iii)日下部太郎は、一時ニューヨーク北方のレイクジョージにいたが、現在は病状がすぐれずブルックリンのフラットブッシュ・アカデミーに移っていること。(iv)左平太はストーンリッジにいて、ハシオウスク氏と毎日勉強していること。9月なかばにはニューブランズウィックにもどる予定であること。

このなかでは、特にこれまでわかっていなかった、大平の帰国に関する情報が含まれていること

の意味が大きい。7月3日のサンフランシスコ出航、同月末横浜着の可能性大という具体的な日程がわかるのである。

なお、発信地のストーンリッジ（ニューヨーク州）はハドソン川をさかのぼったところにある、やはりニューヨークの北方にある町であるが、夏休みに左平太は避暑にいていたのであろう。また日下部太郎は、横井兄弟とは長崎時代からともにフルベッキのもとで学んだ親友で、同じヴァン・アースデール夫人の下宿に住み、ラトガースカレッジに通っていた越前藩士である。彼については、別稿において詳しく述べておいたのでそれを参照してほしい⁽¹⁶⁾。それにしても、左平太の英語が確実に上達していることが、この文面からよみとれる。

③ 横井大平からヴァン・アースデール夫人あて書簡（1869年9月18日）

Nagasaki,
Sept. 18th/69

My Dear Madam,

I was desirous of writing you before but I have been very busy with companion and besides doctor does not allow me to write letters, and pardon me having neglected to write you till now.

Since I left you my health is about the same, I went to my home (Higo) lately and came back again to Nagasaki a few days ago for here is more convenient for the sickmen, I expect to stay here sometime. I was at home only few days, the family wanted me to stay a little longer but I had some business in Nagasaki and I could not stay any longer. I felt too tired for I had so many visit from friends when I have arrived to home. My mother sends her best kind regard to you and many thanks for your beautiful present.

I have seen Mr. and Mrs. Stout several times since I came here. They are both very well indeed.

I am sorry that I could not write to you before. I promised to write to Mrs. Romeyn and many friends there but I am not able to write at once. Please give my kind regard to Mrs. Romeyn and tell her that I shall try to write soon. The doctor did not like to write this letter but I told him I must write a letter to my American home, and I had permission to write a very short letter. I often think about New Brunswick and hope that I shall be able to go America and to see you again. I am quite anxious to here from you and hope you will write to me soon. Remember me to all the family.

In haste
Believe me,
S. Numagawa

これは、管見のかぎりアメリカ側に残された大平直筆の唯一の手紙である。大平帰国直後の彼の様子と、健康状態を知りうる貴重な史料である。内容はつぎのようである。

(i)病状が思わしくないなかで、帰国後数日のあいだ肥後の実家にかえったが、現在は所要もあって、療養に便利な長崎にいること。(ii)実家の母が、あなたからのプレゼントを喜び、くれぐれもよろしくと言っていること。(iii)長崎でスタウト夫妻に何度か会ったこと。(iv)手紙を書くのを医者に止められているので、ロメイン夫人はじめ皆様によろしく伝えて欲しいということ。

文中のスタウト夫妻とは、ラトガースカレッジの卒業生でニューブランズウィック神学校出身のオランダ改革派教会宣教師として来日したヘンリー・スタウトと、その夫人エリザベスのことである。大平は、左平太とともに、ニューブランズウィック神学校在学時代のスタウトに会っていた可能性がある。後にスタウトは長崎に東山学院を、エリザベスは梅香崎女学校の前身となるスタジアス女学校を設立した。

また、同じく文中にみられるロメイン夫人は、彼らが世話になったチャーチストリート62のヴァン・アースデール夫人の下宿経営を助けていた同居女性である。

全体にかなり英文を書きなれた筆跡であるが、兄の字体に比べると個性が強く、くせのある字体になっているところが印象的である。

6. 手紙からみる学生生活 (2)

左平太がアナポリスの海軍兵学校に入った経緯はすでに概略は知られるとおりでであるが、ここで史料紹介をかねて、少し詳しくその過程をふりかえってみたい。

彼らは入国時から海軍学を学ぶことをめざしており、フェリスを通じてその方途を探っていた。メリーランド州アナポリスに海軍兵学校 (U.S. Naval Academy) があり、そこへの入学がベストであったが、外国人の入学は認められていなかった。そこで、フェリスはラトガース・カレッジの卒業生でニュージャージー選出の上院議員フレリングハイセン (Frederic Frelinghuysen) を介してアメリカの連邦議会に働きかけ、アンドリュー・ジョンソン大統領を動かし、ついに1868年7月27日、日本人の6人までの入学を許可する法案を通過させることに成功したのである⁽¹⁷⁾。

その内容は次のようなものである⁽¹⁸⁾。

No. 74-A 海軍兵学校に特定の個人を受け入れる決議

召集された議会におけるアメリカ上院および下院による決議によって、海軍省の長官は、アナポリスの海軍兵学校における教育のため、いかなる費用もアメリカ側は負担しないという条件で、日本帝国政府に指名された学生を6人を越えない範囲で受け入れることが、正式に許可された。

ただし、上記学生に関して、状況により兵学校の規則や規定により、海軍大臣は条件を緩和し、その意向によって必要あるいは望ましい経費を支給することができる。

これによって、左平太が松村淳蔵とともに海軍兵学校に正式に入学したのは、1869年12月8日のことである。

ところでアナポリスの海軍兵学校とは、いかなるところであったのか。ここでその沿革と概要を紹介しておきたい⁽¹⁹⁾。

アナポリスの海軍兵学校は、1845年海軍士官養成のために、第16代大統領ポルク (Polk) のもとで海軍大臣をつとめていたジョージ・バンクcroft (George Bancroft) によって設立された。その前身はフィラデルフィアにあった海軍学校 (Philadelphia Naval Asylum School) であった。1845年10月10日、兵学校最初のクラスが召集された。教官は7人、そのうち4人はフィラデルフィアから移ってきた。学生は50人、年齢も経験もばらばらであった。

敷地はメリーランド州アナポリスのフォート・セヴァーン (Fort Severn) = 「セヴァン川の砦」と呼ばれていた10エーカーの場所に求められ、それまでは戦争省 (War Department) の管轄下

にあったものを、海軍に移して使用された。これはバンクcroftが、学生を大都市の誘惑と喧騒から守るために、隔絶された場所を物色していた結果であった。

カリキュラムは、数学・航海学・砲術・蒸気機関学・化学・英語・自然哲学・フランス語などからなっていた。

学習コースは当初5年とされ、1年目と5年目は学校で、あいだの3年間は海上での訓練となっていた。1850年にコースは7年に変更され、最初と最後の2年間は学校で、あいだの3年間は海上での訓練がなされた。このとき、海軍学校であった名称も現在の合衆国海軍兵学校（U.S. Naval Academy）となった。

さらに1年後3年間の海上訓練はなくなり、4年間の集中的学習と、夏期における海上訓練に変わった。この形が今日の課程の基礎となっている。

南北戦争時、兵学校は一時ニューポート（New Port）に移ったが、1865年9月にはアナポリスにもどり、再出発した。コースも再編され、①現場指揮官（Line Officer）になるためのコースと、②技術部隊（Engineering Corps）に入るためのコース、の2つが設けられたという。しかし1899年この2つのコースは統合され、今日にいたっている。

なお1850年に設けられた兵学校生徒の日課は、次のようになっている。

起床	6：15～6：30
教会での礼拝	
朝食	6：45～7：30
暗誦（recitation）	8：00～1：00
昼食（dinner）	1：00～2：00
暗誦	2：00～4：00
軍事教練・レクリエーション	4：00～日没
夕食・行進	日没時から
夜の学習	6：25または6：55～9：30
消灯	9：30～10：00

また、入学生数・卒業生数については、P. Benjamin による1852年から1864年までの集計によれば、入学をゆるされるのは入学希望者の3分の2ほどで、この間1,209名が入学しているが、そのうち卒業できたのは269名であったという⁽²⁰⁾。卒業確率は22パーセントというのが実態であった。

なお当時においても、左平太によって「広大にして全備」と評された海軍兵学校であったが、現在の学生数は女子も含めて4,000人、敷地も338エーカーにふえ、校舎も石造の近代的建物に替わり、世界最強をほこるアメリカ海軍の中枢を担う人材の養成機関としての威容を示している⁽²¹⁾。

次の史料は、左平太がこの兵学校から発信した英文書簡である。

④ 横井左平太からヴァン・アースデール夫人あて書簡（1870年1月15日）

U.S. Naval Academy
Annapolis Md.
Jan. 15th 1870,

Mrs. Van Arsdale

My dear Madam,

I received your kind letter from my friends a few days ago, and I was much pleased to

hear from you and glad that you were all well. I intended to write you as soon as I arrived here, but I have been so busy since then that I could not write until today. I hope you will pardon me for having neglected to write you before.

Last Saturday night I was quite surprised by the unexpected arrival of two of my friends. I was very glad to see them, and I was very much pleased to hear from my home. My two friends Tuda and Hayashi were going to England, but since they come to this country they want to stay here, so they do not intend to go to England, and they will study in New Brunswick. I think it is better for them. I am sorry that they can not speak English well so I feel they will give much trouble to you, I hope you will be kind enough to take care of them.

I received the letter from my brother a week ago. He said that he had somewhat recovered from his illness, and he sent his likeness to me. I think he had improved a little since he has been in this country, I was very anxious about him, and I am very glad to hear that he is better.

Since we came to the Naval Academy all the professors and also midshipmen have been very kind to us, so I feel quite contented. We are studying separately at present because we are so much behind the rest of the class, we want to catch up with the class by the next term, if it is possible.

I am working very hard now, and I hope I shall complete the course of study during the four years.

I wish very much to write a long letter but I can not do it for I am too much occupied with my studies.

Please give my kind regards to Mrs. Romeyn also Mrs. Rackuell and all of your family,

Yours very truly,

Ise Sataro

アナポリスの海軍兵学校入校後、ヴァン・アースデール夫人にあてた第一信である。

なお、左平太が薩摩藩の松村淳蔵とともに、海軍兵学校にはいったのは、既述のとおり正式には1869年12月8日（後述する左平太の国許の友人あて書簡では12月6日となっている）である。したがって上記史料の「We」が、左平太と松村淳蔵を指すことは、いうまでもない。また、文中の「Tuda」と「Hayashi」は肥後藩士津田亀太郎と林玄助である。

手紙の内容は次のようである。

(i)先週の土曜の夜、友人の津田（亀太郎）と林（玄助）が突然やってきたこと。(ii)そのとき2人は熊本の実家からの手紙と、アースデール夫人の手紙をもってきたこと。(iii)津田と林はイギリスに向かうつもりであったが、アメリカに止まりニューブランズウィックで勉強することになったので、よろしく願いたい。(iv)一週間前に弟の大平から手紙を受け取ったが、彼の病気は少しよくなったらしく、写真が同封されていたこと。(v)ここ海軍兵学校では、教官や生徒がとても親切にしてくれること。(vi)勉強が遅れていて、松村とともに現在別メニューで勉強しているが、次の学期までになんとか追いつき、4年間で課程を終わらせたいと思っていること。

ここには、4年間で卒業したいという希望と、現実の勉強の進み具合のギャップのあいだで、必死にあがっている入学直後の様子が、率直に語られている。

ここで、左平太が入学したときの海軍兵学校の様子を確認しておきたい。左平太が国許の元田永孚・下津休也に送った書簡によれば⁽²²⁾、先に述べた創立期のものと比べてみると、まず日課の時間配分など、若干の相違がみられる。以下左平太と一緒に兵学校にはいった松村淳蔵の、吉田清成あての書簡にみられる学校生活を紹介しておきたい⁽²³⁾。

一 朝六時の砲声に直に床を離れ、衣服を着し、部屋を掃攘し、ニートリーに保つ事也。七時の大鼓に皆アカドミーの庭前に集る。左候て二行に列して立つ、時に第一等諸生一人、第二或は第三等の諸生兩人、第四等海軍士の衣服ニートリーに着せし哉、或は履をキリーンにせんかを改む、右終って亦二行に列して食事部屋に入る。各のチェヤの後に立ち、其時第一等の諸生より「テーキチェヤ」と令すれば皆チェアに座す。

扱、食事終れば、亦以前の書生マーチオウと号すれば各二行に列してまた食事部屋を立つ。如斯。食事例如斯。夕八時の大鼓に各勉学をはしむ。十時の大鼓に火を消す。十時後決して火を用ゆる事を免さす。

学校の規則極めて厳也。海軍生、酒を呑み、煙草を用ゆる事別して禁ず。若、過て是を破るものは立処に学校を追出す。

6時大砲の合図で起床、7時太鼓の合図で整列、身だしなみの点検、食事、夜8時太鼓の合図で勉強終了、夜10時就寝となっている。こうした厳しい日課は、左平太をして「唯毎日々規則に縛られ日月を送居申候」と嘆かしめるほどのものであった。

また兵学校の生徒数については、同じ松村の書簡に次のような記述がある。

○海軍士凡四百人に及へし。内九十六人第四等の諸生、則弟がカラスメート也。右人数分て四隊となす。…右人数海上砲術の時は一隊を十二つゝに分る。第一の大砲兵、第二の大砲兵と如斯分る。僕は第四隊の水夫第十六番大砲兵士也。

すなわち、在籍者約400名、1学年は約100人、これを海上訓練のときは12グループにわけておこなうというのである。ところが左平太の書簡では、在籍者253人これを4学年に分けているという。この数字の違いはどこからくるものであろうか。ちなみに、先のP. Benjaminの述べた数字から単純に計算すると、13年間に在籍者1,209名であるから、1年平均93名となって松村の述べる数字に近くなる。しかし、この時期コースが2つに分かれていたことを考慮する必要があるかもしれない。

学科は左平太の書簡によれば、数学・天文学・地理学やフランス学・スペイン学などの基礎科目からや砲術・器械学・築城学・航海術などの実践的なものまで含まれている。厳しい日常生活のルールのなかで、グラマースクールレベルの学習から、一気にここに適応し、成果をあげるのは、相当の努力とともに、理科系の才能と、相応の語学力が求められたのではなかろうか。しかも前に述べたように、卒業確率が22%（しかしこの数字には南北戦争の勃発という特別な事情が反映している可能性があるが）という厳しい現実があったことをかんがえれば、後述するように、左平太が言葉の壁に苦しみ、卒業できなかったというのも無理からぬことであった。むしろ同時に入学し、最短の4年間で卒業した松村淳蔵（1869年12月8日入学、1873年5月31日卒業）の優秀さを褒めるべきであろう。

この後の左平太については、1871年10月24日退学して一時帰国して以降、アメリカに戻った

後も復学した形跡はない⁽²⁴⁾。この間の経緯については、次に示す再渡米後のフェリスあて書簡に述べられている。

⑤ 横井左平太からフェリスあて書簡（1872年12月4日）

West Newton, Mass.

Dec. 4, 1872

Mr. Ferris,

My dear Sir:

I am also thankful for your kind advice. As you say, I do not wish to discontinue my profession of the naval service, but I have deeply considered about the position which is best for me and our country. I wish to go back to the Naval Academy, but I must study English more at another place. I think, to talk and to write the English with facility is more important than any other studies. One thing is that, if I were younger, of course, I would go back to the Naval Academy and study the naval profession, because at first we as a nation wish to study about the Navy. It is very important for our country. We got the permission, six of us, to enter the Naval Academy at Annapolis from your government under your kind assistance, and after that we got the appointment from our government. In our first plan with regard to these matters, Kusakabe, myself and my brother entered the school, but both of them could not proceed their designs, and they are both dead. I think that it is impossible to study the military service when as old as I am. Therefore, my opinion is that I will study English well and I must know about the military system and principle of your government, and I must return to our own country as soon as possible and shall help our government because they do not know any of the laws of the Navy and Army. Such matters are quite a new thing for our people.

これは左平太が再渡米後にフェリスに返信のかたちで書いたもので、ボストン近郊のウェスト・ニュートンからの発信である。

内容はつぎのようである。(i)アドバイスは大変ありがたくおもうが、熟慮した結果海軍兵学校にはもどらず、語学を他のところで学ぶつもりであること。(ii)当初の計画では日下部太郎と弟の3人で兵学校にまなぶつもりでいたが、2人は他界してしまい、私一人では年を食いすぎていて海軍の実務を学ぶことは難しいこと。(iii)今後は、英語をさらにおさめ、軍事システムや政治の原理を学び、帰国して陸海軍の法制面から新政府に貢献するつもりであること。

これまで左平太は再渡米後、アナポリスの海軍兵学校に復学したと推測されてきたが⁽²⁵⁾、書面のなかのフェリスの復学のすすめにたいする彼の謝絶の姿勢をみると、すでにその意志はないことが確認できる。実際アナポリス側の史料では、その事実は確認できず、復学はなかったものとすべきである。

また文面からは、弟と越前藩の日下部太郎の3人で兵学校に進学するはずが、それがかなわなくなったことへの無念の思いと、喪失感がよみとれる。大平は1871年7月に熊本で、日下部太郎は1870年4月にニューブランズウィックにおいて、それぞれこの世を去っている。

なお、ウェスト・ニュートンにはジョゼフ・アレンの経営する私立学校があり、ここでは大学入学希望者が多く学んでいたという。勝海舟の娘婿にあたる目賀田種太郎も1871年ここに入りラテ

ン語などを学び、翌年にはハーバード大学ロースクールに入学している⁽²⁶⁾。左平太も、親しくしていた勝小鹿や高木三郎などのつながりから目賀田と接触し、アレンの私立学校で学んでいた可能性が考えられる。

7. 左平太の交友・金銭管理など

このほかにも、横井兄弟に関して、すでに紹介された史料でありながら十分活用されておらず、有用と思われるものを2点ほど紹介しておきたい。

⑥ 畠山義成から横井左平太あて書簡（1869年8月24日）

先達而者御懇切の御鴻翰被成下慥ニ相達シ謹而拜見仕候処、弥御精励後進学之由、先以大慶不斜奉賀候、然処小僕二者此体行ニ任事成之度事ハ大抵終リ夫故、其砌高雲師之許江見舞ヒ夫レヨリ続而 Prof. Marshall 之諸招ニすがり彼表江兩日滞在、其翌日者 West Point 之近辺 Iona 島江 Excursion トシテ差越シ翌 Saturday 14th of inst. ニおひて新克約（ニューヨーク）江出府致翌 Sunday 者 Plymouth Church 江罷越、夫より平理（ヘリス）諸師之招キニ従ひ before last Monday The 16th ニ爰許江参着致候処、勿論御存し通其時分者日下部先生御出ニ而当分ニ至る迄も御壮健ナリ、Mr. & Mrs. Mack 其余之□□杯実ニ非常に懇切之会积ニ而不調法之僕ニおひてハ失礼之義も不少筈と却而痛入程之事ニ御座候、此方家族之須徳礼讓温和不少事ハ大兄右以御存知之事なれば格別申上ルニ不及候、扱僕爰許ニ着雖直ニ可伺筈ニ御座候処、日下部先生之御口氣ニ而ハ大兄近此爰許江御来臨之様承知仕先心待申上今日迄黙止候次第、遅引之罪平ニ御宥免之程所仰罷在候、賢兄之尊意通り小僕二者当所四方草木黍ナト繁茂シテ□□□ヲ甚□好仕候、○勝君も先日 Lake George より御帰リニ而当分爰許江御滞留御壮榮なり、及ひ松村ニも参り随分にぎへ敷甚愉快ヲ尽シ候次第御座候…御閑暇次第何分之御模様御越シ被下候ハハ別而難有御座候

やはり夏休みに薩摩藩士の畠山義成（杉浦弘蔵）がフェリスの招きでロングアイランド（現在ではフラット・ブッシュをふくむその西端がブルックリン地区としてニューヨーク市の一部となっている）のフラットブッシュ・アカデミーに8月16日にやってきて、日下部と会い、左平太もここに来るとの情報を受けて、楽しみに待っていると書き送ったものである。ここには、勝海舟の息子である小鹿もきており、薩摩藩士松村淳蔵も合流し、まさに「にぎにぎ」しい日本人留学生交歓の様子がうかがわれて興味深いものがある⁽²⁷⁾。フラットブッシュ・アカデミーについては未詳であるが、フェリスと縁のあるオランダ改革派教会系の学校であったことが推測できるだけである。

すでに弟の大平はアメリカを去っており、当時左平太が避暑のため滞在していたストーンリッジにむけてフラットブッシュから発信されたものとおもわれる。この時点での左平太周辺の様子が読み取れよう。なお、畠山については横井兄弟と日下部がフェリスを紹介し、その世話をえて、1868年6月から畠山はラトガースカレッジに学ぶことになったという経緯を付記しておこう⁽²⁸⁾。

⑦ 横井左平太から日下部太郎あて書簡（1870年3月3日）

第二月二十六日御仕立の貴書相達、辱奉拜誦候。先以益御壯剛御勉学の由、珍重不斜奉慶祝候。二に小生不相変碌々消光罷在候間、乍憚御放意可被成下候。

扱先日 Money の一条得貴意候処、早速ヘルリス氏まで御尋問被成下、千万有難謹而御礼謝申上候。僕もヘルリス氏の書状にては聊かの不審なきにしもあらずと雖も、御存知の通り僕例の粗忽にて、昨春以来ヘルリスより受取候金高全く覚え不申、大に当惑罷在候処、貴兄御細算にて明に相分り、大に安心仕候。

先日ヘルリス僕手元の残差送候百ドル、去るサンデー貴兄御手元の残差上置き、定而御落手被成下候事と奉存候。昨春ヘルリスより御互へモニエの受取り差上候間、御落手被成下候。

尊書の越にては本邦よりの脚船も過日サンフランシスコまで入港せし由、何れ近日中には故国の一左右可有之、夫れのみ相待居候申候。何卒此のメール共には、御互その学科（料カ…高木）来りかしと祈願する次第に御座候。大隈などは会計局の全権を司り、何共も致居候か実不承知千万に御座候。此の一事を以て我が皇国の因循思ひやられ申候。

大兄にも来月は定めて一七日御休業に相成可申、其節共に、御見物旁当地まで御出被成候ては如何。必ず〱御来臨を奉待候。段々得貴意度義も御座候得共、何分閑暇を得不能其儀、先貴酬まで早々頓首

第三月三日水曜日燈火

伊勢佐太郎

日下部太郎様

二白 乍憚不順の氣候折角御自養御專一に祈申候

年代は筆者の推定であるが、手紙の内容や二人の置かれていた状況を考えると、1870年以外を想定することは難しいのではなかろうか。原文を参照していないので、発信地や送り先が特定できないのが残念である。文意が不明なところもあるが、これによれば彼らの生活資金はフェリスが管理し、左平太や日下部太郎には書面で会計報告がなされていたらしいことがわかる。彼らの授業料をふくむ費用は教会が立て替えており、国許から送られてくる金はフェリスのもとに送られたのであろう。

ここで1868年（明治元年）のものであるが、横井小楠がフェリスにあてた礼状を紹介しておく。これまでは英文でしか知られていなかったものであるが、写真版を入手したので、筆者がそこから解説したものである⁽²⁹⁾。金銭の流れの一端も読み取ることができよう。

謹而呈書仕候。就者伊勢佐太郎、沼川三郎と申者、一昨年来貴国ニ学問修行として罷出候。右者私甥共ニ而有之候。先生非常之御世話ニ罷成、兩人より御洪恩之次第、毎度申越誠ニ以感銘之至、御礼儀表ニ申上様無御座、唯々拜謝仕候。

今般学料三百トル先生迄差出申候。兩人ニ御渡被成被下度、呉々奉願候。此段御礼旁拜呈仕候。

以上

明治元年九月十九日 日本国京都 横井平四郎

ニウヨルク

ヘルリス先生

玉机下

フェリスがこうした国許からの送金と立て替え金を差し引き計算し、左平太ら留学生に報告していたのではないだろうか。しかし、左平太はこうした金の計算が不得手で、緻密な日下部太郎がそのフォローをしていた様子がうかがえて面白い。

また彼らが日本の国内情勢を非常に気にしていて、本国からの郵便を心待ちにしていた様子も読

み取れる。当時、彼らが新政府の会計局に関して、由利公正の後任の大隈に不信感を抱いていたことがわかる。

なおこれが1870年のものとすれば、当時日下部太郎の体調はかなり悪くなっており、この翌月にはニューブランズウィックに病没することになる⁽³⁰⁾。

おわりに

以上、アメリカ留学中の横井左平太・大平らに関する、下宿を含む生活空間、グラマースクールでの日課や学年暦、夏休みの様子、またアナポリスに移って以降の左平太の動きなどについて、かなり明らかにすることができたように思う。

ここで知れた事実をふまえることによって、たとえば従来からニューブランズウィックにこの後多くの日本人が留学・滞在しながら、彼らと地元コミュニティとのかかわりがはっきりしないと指摘されてきた点に関して、次のような解答が可能となるのではなかろうか⁽³¹⁾。一つは、ニューブランズウィックは新興の工業都市であり、ボストンの場合に見られるような富と名誉を兼ね備えたブラーミンなどの上流階級が育っていなかったこと。つまり、地域として、彼らを受け入れる基盤が成熟していなかったこと。二つは、オランダ改革派教会という、アメリカ社会では少数派の人脈（それだけに強固なつながりを持ち、教勢拡張にむけて授業料の立て替えなど経済的な優遇措置も惜しまなかった）のなかで生活していたため、外部との関係が希薄だったとおもわれることである。ニューブランズウィックから30キロと離れていないところに位置するプリンストン大学の学長が、「少数のオランダ人が経営しているニューブランズウィックにある優秀なカレッジ」と当時のラトガース・カレッジを皮肉ったというが⁽³²⁾、そのことがまさにこの時期のラトガース・カレッジあるいはその付属予備校というべきラトガースカレッジ・グラマースクールの置かれた社会的位置を雄弁に物語っている。

また、横井左平太に関して「三年の長い間、大学進学のための準備教育をするグラマー・スクールに在学するはずはなく、その後ラトガース大学に籍を移し、それからアナポリスへ移ったものと思われる」⁽³³⁾とする先学の記述についても、それは単なる憶測に過ぎないと反論することも可能となる。すなわち、彼ら兄弟の将来への希望と、そこで必要とされる英語力・知識量からみて、彼らがグラマースクールにおいて、3年間の科学校準備コースをとることは不自然ではないのである。ちなみに、グラマースクールの名簿は残されていないが、ラトガースカレッジの学生名簿に彼らの名前を見出すことはできない。歴史に希望的観測や憶測をもちこむことは禁物である。

しかしまだ調査は十分とはいえず、とりわけ横井大平（沼川三郎）に関する一次史料が少ないのが残念である。後日を期したい。

〈注〉

- (1) 先行研究としては、おもに次のものがある。杉井六郎『明治期キリスト教の研究』（同朋社、1984）、西忠温「熊本における幕末・明治初期海外留学生」（『熊本英学史』、本邦書籍、1985）。なお拙著『横井小楠と松平春嶽』（吉川弘文館、2005）もこれについてふれているので、参照されたい。
- (2) 左平太・大平のニューヨーク到着がいつであったかは、はっきりしないが、薩摩藩の仁礼景範ら5人の書生が11月4日にニューヨーク到着後2週間を経て、宿舎に左平太・大平二人の訪問を受けたという記録（犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新 井上馨と幕末藩士』NHKブックス、p.187）や、横井兄弟がフェリスあてに持参したフルベッキの紹介状の受付日が11月23日となっている（前掲杉井論文、p.80注5）ことなどから、11月をとった。なお10月説は、フェリスの後年の回想にもとづくもの

であり、信憑性は低いと考えられる。

- (3) ラトガース大学グリフィス・コレクション。“THE BEGINNING OF THE JAPAN OF TODAY”と題した、1905年10月11日付けのJ.M. フェリスによるグリフィスあて寄稿文 (Group I, Box 19.1)
- (4) 前掲拙著参照。
- (5) 以下の記述は、次ぎのものに拠っている。A. E. Gordon, *New Brunswick and its Industries* (New Brunswick NJ, 1873)
- (6) *The New Brunswick Times, The City of New Brunswick* (New Brunswick NJ, 1909)
- (7) Michael Moffatt, *The Rutgers Picture Book* (Rutgers Univ. 1940)
- (8) BIRD'S EYE VIEW OF NEW BRUNSWICK (New Jersey, 1874)
- (9) 以下の記述は次の文献に拠っている。Frank V. Sperduto, *A History of Rutgers Preparatory School* (1967)
- (10) Rutgers College, *CATALOGUE OF THE OFFICERS AND STUDENTS OF RUTGERS COLLEGE 1866-67* (New Ark, 1867)
- (11) Rutgers College, *RUTGERS COLLEGE ANNUAL CATALOGUE 1871-1880* (New Ark, 1880).
なお、文中の□は筆者(高木)が付したものである。
- (12) Van Arsdale, Maria Papers. 1 Box [Ac. 1735, A (Van Arsdale)] (ラトガース大学ユニバーシティアーカイヴス)。なお、英文書簡の様式や句読点は可能なかぎり原文にしたがっている。
- (13) Katsuji Kato, “Japanese Students at Annapolis”, *The Japanese student* (1918, Nov), 60.
- (14) 犬塚孝明「翻刻 杉浦弘蔵ノート」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』(第15号, 1986, 119・120頁)をもとに、原典(尚古集成館所蔵)を確認して若干の修正をおこなった。
- (15) 永井環『新日本の先駆者 日下部太郎』(福井評論社, 1930) 68・69頁。
- (16) 拙稿「黎明期の日本人米国留学生——日下部太郎をめぐる——」『大妻女子大学紀要』(文系37号, 2005・3) 6頁。
- (17) 注2に同じ。
- (18) 注13に同じ, 58頁。
- (19) 以下の記述はおもに次の史料に拠っている。Walsh, “*The United States Naval Academy*”, *The Congress 3rd Session SENATE Document No. 181* (1938)
- (20) W. D. Puleston, *ANNAPOLIS Gangway to the Quarterdeck* (1942)
- (21) U. S. Naval Academy のホームページ (<http://www.usna.edu/VirtualTour/150years>) 中の A Brief History of the UNITED STATES NAVAL ACADEMY を参照した。
- (22) 1870年1月23日付け書簡。前掲, 西忠温論文 64・65頁。
- (23) 1869年12月18日付け書簡。『吉田清成関係文書三』(思文閣出版, 2000) 134・135頁。
- (24) 門田明『若き薩摩の群像 サツマ・スチューデントの生涯』(春苑堂出版, 1991) 157頁。
- (25) 前掲, 杉井六郎論文, 西忠温論文参照。
- (26) 塩崎智『アメリカ「知日派」の起源 明治の留学生交流譚』(平凡社, 2001) 146頁。こうした点を考慮に入れることをふくめて、左平太再渡米後の動きについては、今後全面的に見直す必要がある。
- (27) またこれに関連して前掲拙著『横井小楠と松平春嶽』171頁の記述を参照してほしい。
- (28) 犬塚孝明「翻刻 杉浦弘蔵メモ」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』(第18号, 1990) 37頁参照。
- (29) Katsuji Kato, “EDUCATIONAL LETTERS FROM JAPAN”, *The Japanese student* (1917, Apr.), 165.
- (30) 前掲, 拙稿「黎明期の日本人米国留学生——日下部太郎をめぐる——」7頁。
- (31) 塩崎前掲書, 92頁。
- (32) F. ルドルフ『アメリカ大学史』(玉川大学出版部, 2003年) 245頁。
- (33) 前掲, 西忠温論文70頁。

なお、本稿は2002年4月から、2003年3月までのあいだに、ラトガース大学に客員研究員として在籍した時の調査・研究の成果の一部である。